人とつむぎ、織りなす日々のなかで

高齢期の発達

第9回　自分らしい表現で他者とつながる

張 貞京

ちゃん　ちょんきょん／京都文教短期大学准教授。共著に『保育者のためのコミュニケーション・ワークブック』（ナカニシヤ出版）。

先月号で紹介したヒサシさんとノリエさんのように、大切な人の死に想いをもちながらも伝えてはいけないと感じていたり、すぐに想いを表現できない人は、他にもいるのではないでしょうか。支援する側として、今見えている姿から、本当の想いを読み取る姿勢をもち続けたいと思います。

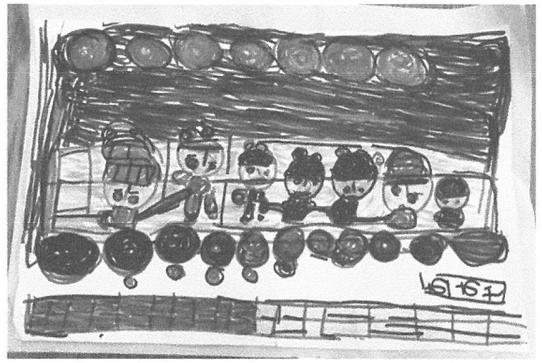
想いの表現には、障害や発達によるちがいもありますが、当然ながら相手との関係性や距離もかかわってきますし、自分らしい表現ができる場が保障されることも重要だと考えられます。大津市にあったあざみ寮が現在の石部町に移転した際、同じ敷地内に開設されたもみじ寮に、近江学園から20代で入寮したハシオさんをとおして考えてみたいと思います。

ハシオさんは、入寮当時から変わらず農耕科（後に、農耕班）でしごとをがんばり、60代後半で血液の疾患で亡くなるまで、自信と誇りをもつハシオさんらしい表現と活動をとおして自ら他者とかかわり、つながり続けた人です。ハシオさんが余暇時間に描いていた絵、もみじ・あざみの劇活動への参加、農耕班のしごとから考えます。

「絵　きれいやで！」

ハシオさんの気持ちの表現は、時に否定的になることもあり、身近にいればいるほど受け止めがたいと感じることがあったようです。職員いわく、「口が悪い」のだそうです。

私がはじめて出会った時、40代のハシオさんは、もみじ・あざみのなかで一番背が高く、遠くからこちらをじっと見つめていました。どうかかわるか、ハシオさんなりに距離やタイミングを考えているようでした。近づいてきたハシオさんは、「絵描いてる！」「きれいやで！」と自慢げに話します。しばらくしてから、部屋から持ってきた絵をすーっと渡してくれたハシオさんは、描かれたのが「人形」や「車」で、きれいな色を使っていることを教えてくれました。それから、農耕班のみんなで乗って出かけたバスや祭りの提灯、手をつないだたくさんの友だちなどが描かれた絵の話はもちろん、しごとでがんばった話をしてくれるようになりますが、口の悪い姿を見ることはありませんでした。それは、身近な職員、頼れる好きな相手にしか見せないのです。



▲みんなで乗っておでかけ

ハシオさんとかかわってきた生活棟の職員は、元気な頃のハシオさんから怒られ続けていたそうです。その職員が実習生として、もみじ・あざみに来ていた時、ハシオさんはとてもやさしく「どこから　来たん？」「僕のお母さん　美人やで」「絵やるからな」と声を掛けてくれていたといいます。ところが、職員となって、決まりごとを求めたり、まちがいを注意したりしていくと、「きらいや」「あっちいけ！」「アホや」「頭くるくるパーや」などとハシオさんが怒り、時には周りの友だちまでが「○○さん（職員）が　ハシオくんを怒らせた」と、ハシオさんの味方をしていたそうです。その職員もつい「きらいで結構です」と返しては、穏やかに応じられない自分を反省する日々を送っていたと振り返ります。

60歳を過ぎた頃に疾患が見つかり、頻繁に通院するようになると、主治医に渡すための絵を毎回準備していたといいます。病状が悪化し、継続的な輸血とその量が増えていくにつれ、体力が低下していったハシオさんですが、痛みが和らげばいつでも絵を描いていたそうです。徐々に、一人で歩くだけでひどく疲れるようになり、職員の介助が増えていきます。その頃のハシオさんは、介助をする職員に「堪忍」「○○さん（職員）ありがとう」「○○さん　大好きや」「また　絵描いたるからな」と感謝の言葉を伝えるようになります。

その姿に、職員はハシオさんが弱気になったために発した言葉だと考えたそうですが、長い間、身近でサポートしてくれた職員に対して、意地を張らず素直に感謝を述べるようになったハシオさんの姿だったのだと感じます。元気な頃のハシオさんが、身近にいる職員に対して自分の想いを表現できていたことは、否定的な表現ではありますが、ハシオさんが職員を共に暮らす存在として認めていたからでしょう。そして、ハシオさんが描く絵は、好きなものを表現するだけではなく、他者への信愛と感謝を示すための手段でもあったと考えられます。体験したことを絵のなかに表現しながら、それを渡す相手を考えるハシオさんの時間は、充実したものであったにちがいありません。

自分らしい表現～劇活動

もう一つ、ハシオさんの表現を豊かにした活動が、もみじ・あざみの劇活動です。

大津市のあざみ寮時代にクリスマス会などで発表会のようなものはあったそうですが、１９６９年の石部町への移転